医業経営の現場から

file092　中国・四国地区

心臓血管外科医から24時間365日対応の在宅医へ転身

退官後の父が開業

ルスコクリニックは2015年4月、高井秀明院長の父、高井研一氏（現名誉院長）が地域医療を支えるために岡山市内に開設した在宅療養支援診療所だ。消化器内科が専門の名誉院長は勤務医を続けた後、岡山県立大学で長らく教鞭を執り、退官後も医療専門学校の校長を務め医療従事者の育成に取り組んでいたが、地域の介護・看護関係者と関わる中で、在宅医療のリソースがこの地域にはまだまだ不足していると感じ開業を決断した。

家族の理解あってこそ

その頃、高井院長は東京で心臓血管外科医として第一線で活躍していたが、岡山の家族から高齢で開業する父の手助けをしてほしいとの頼みを受け、2016年7月に在宅医へと転身した。当時の心境について、「心臓血管外科医というのは、専門知識はもちろんのこと、高い技量も必要で、やりがいのある領域だと思いますが、体力的にどこまで続けられるか未知数でした。いずれは開業も選択肢の1つと考え始めるようになっていたところに、父の開業の話が持ち上がり、たまたまタイミングが合ったという部分もあります」と話す。ただ、実際の転身に一番重要だったのは院長家族の理解が得られたことだったと続ける。

「東京は便利で簡単に何でも揃う。新しいモノや情報にあふれているので、そのままいれば楽しいこともあったでしょう。岡山に帰って来て苦労したのは、私よりも妻の方だと思います。子どもも学校が変わるなど大変だったと思います。ですから『一緒に来てほしい』とわがままを言ったことに、最終的に家族が理解を示してくれたことに感謝しています」。

異なる視点で医療が見えるように

在宅医への転身直後は戸惑いもあったが、「勤務医のときは、病院の中のことしか見えておらず、患者さんが家に帰ったらどんな生活をしているかわかりませんでした。外来ではみんな『ちゃんと薬を飲んでいますよ』と言いますが、実際は薬を飲めていなかったり飲み忘れていたりするわけです。それが訪問をして患者さんの生活の場で診療をするようになって、患者さんがどんな生活をしているのか、家族との関係はどうなのかも含め、勤務医時代とは異なる視点で医療が見えるようになりました。かつて、長崎大学病院勤務時代に経験した五島列島の診療所での診療応援を思い出しました」と話す。しかし、経営を軌道に乗せるのは容易ではなかった。

多職種配置が増患に

当初はビル診1階でスタート。「父も臨床を離れて約20年経っており、患者は40～50人。それでは経営が難しく、医師1人当たり80人を目標に掲げました。また、訪問診療にはまず患者さんに来てもらう必要があると考え、敷居が低く相談しやすい

医療法人社団ルスコ ルスコクリニック

■所在地　岡山県岡山市北区大安寺南町1丁目7-33
■理事長・院長　高井 秀明
■診療科　内科・循環器内科・心臓血管外科・外科

「なかなか見つけられない、と患者さんから言われることも多い」という独特の外観（左）
院内は落ち着くと評判が良い（上：受付・待合室）

庭には四季折々の花が咲き誇る

い雰囲気の方がと、2017年に今の木造の民家に移転しました」。

開業4年目で法人化、そして開業8年目となる現在、患者数は約160人と目標を達成・維持できるまでになった。「患者は大多数がケアマネジャーからの紹介で、そこが当院の一番の特徴です。次が訪問看護ステーション、そして病診連携、最後が家族からの相談でほぼその4パターンです。ケアマネジャーや訪問看護ステーションからはだいぶ認知され地域との信頼関係も築けてきたと思います」と話す高井院長に地域からの紹介増の秘訣を聞くと、「医療相談員と看護師を配置したこと」と明かしてくれた。相談の電話が来た時にいきなり医師が対応するよりも、相談員が応じる方が相手は話そうとしてくれるのだという。

クリニック名と医療理念

多職種配置はクリニック名および医療理念と関わる。「ルスコ」とは、フィンランドの言葉で「夕暮れ」「黄昏」を意味する。「人生の『夕暮れ』時を迎えた高齢の方々が、われわれが提供する医療と出会い新たな『朝』を迎えてほしい。そして味わい深い人生を刻み続けてほしい」との思いが込められているそうだ。そして良い老後、良い最期を迎えられるようにサポートしていく「共に生きる医療」を理念に掲げる。そのために医療相談員と看護師を配置したことで、患者だけでなく、地域の各機関との連携、ひいてはクリニックの経営に良い影響を与えることに結びついている。「多職種配置を病院だけでなく診療所でも診療報酬上で評価してもらえればとは思います。多職種で業務を分担して運営するのは理想的です」。

電子カルテと連携

目下の経営課題は訪問時の電子カルテの導入。外来での電子カルテは導入済で、培われたデータを生かしながらペン型タブレットで運用できるシステムを希望しているとのこと。その紹介も含め医業経営コンサルタントには多様な情報提供を期待している。「医院経営では働く効率を考えながら医療機器の導入や新システムの運用を考えなくてはいけないので、効率的に業務がこなせるよう新しい情報を持ってきてくれることが一番助かります」。

今年の4月からは隣の倉敷市にある在宅クリニックおよび病院と連携して対応する、病床ありの機能強化型（連携型）在宅療養支援診療所の認可も受けた。連携先と緊急時の対応や定期的な勉強会を行うことで、地域をより深く、より“面”で支えていくつもりだ。

理事長・院長　高井 秀明 氏

長崎大学医学部、同大学大学院医歯薬学総合研究科を卒業。2000年より、長崎大学病院、長崎医療センター、国立循環器病センター、大分県立病院、公益財団法人心臓血管研究所附属病院などを経て2016年7月よりルスコクリニック。
日本循環器学会循環器専門医、三学会構成日本心臓血管外科専門医・修練指導医、日本外科学会外科専門医、岡山県難病指定医、緩和ケア研修会修了者。

クリニック名の由来にちなんで、ロゴマークはフィンランド国旗のデザインを取り入れている

訪問・外来診療の合間に、地域の老人会などの集まりに出向いて講演会講師も務める。「いろいろなところに顔を広く売っておかないと」と高井院長。この日は「コロナから身を守る」「ACP（人生会議）」をテーマに講演

名誉院長と共に診療に従事（上）。
訪問診療は2チーム体制で午前4人、午後3～4人を担当。合間に外来をこなす。毎日17時からの全体ミーティングで、チーム間の情報共有を図っている